第３章　柏木城跡中心部分の現状

第１節　概　　要

柏木城跡の範囲は、江戸時代以降に示されてきた主郭を中心とする範囲と、石田明夫氏が指摘する主郭の周りに広がる東曲輪群、西曲輪群、北曲輪群を含めた範囲で捉える見方[石田1999、本書p54]がある。

北塩原村城館等保存・整備・活用委員会では、検討の結果、遺構の特徴や組み合わせから、主郭とそれに近接する曲輪群について柏木城跡中心部として判断した。その範囲は主郭（曲輪１）、曲輪２・３・４・５・６、馬出、帯曲輪１・2a・2bとする平坦面と、それに伴う堀切や竪堀、石塁などである[図3-1]。

主郭を含めた中心部の規模は、東を曲輪４東側、西を虎口３付近までとすると東西約300m、北を虎口２北側とし、南を虎口１南側の曲輪６付近までとすると南北約130mを測る。

標高を見ると、主郭（曲輪１）は、城跡の北に位置する大塩集落との比高差約110mを測る標高約510mの地点にあり、また南西の大久保集落とは約30mの比高差を測る[図3-2]。

柏木城は、地形的に見れば南西側からは傾斜が緩く、北側には幅約20mの大塩川が西流することや傾斜が急であること等から、北方向からは攻めにくい立地となっている[図3-3]。

柏木城跡中心部の北側や西側の斜面下で展開する北曲輪群、西曲輪群、そして南側の谷も含まれるとすれば、北曲輪群から曲輪６付近まで南北350m、曲輪４東側から西曲輪群西端まで東西約450mを測り、石田氏の述べるように東曲輪群までを含めると東西約1.1kmもの範囲となることから、今後、十分な表面観察や発掘調査などによる考古学的な検証が必要である。

以下、本章では、柏木城跡中心部について遺構ごとに概観する。北曲輪群、西曲輪群などについては今後調査を行い、別の機会に報告することとしたい。

報告は、主郭（曲輪１）から周辺の遺構、馬出を含む曲輪4、外縁の石塁、南谷地の順序で行う。遺構名は石田明夫氏が付けたもの[石田1999ほか]をできるだけ踏襲しつつ、新規でつける場合には、付属する曲輪の番号と合わせて名称を付した。曲輪４の石積遺構は「石積4-1」、馬出（U）に付属する虎口は「虎口U-1」、帯曲輪２（O2）に付属する竪堀は「竪堀O2-1」などとしている。なお、同委員会の検討により遺構名称を変更している箇所もある。

第２節　主郭とその周辺の遺構

１　主郭（曲輪１）

柏木城跡で最も標高が高く、広い曲輪である。全体の形状は南北にやや長く東西に広がった紡錘形となり、東・南・西側には土塁がめぐる。内部は三区分されており、石を積んだと見られる石塁と、段差で区画されている。北西側を区画Ａ、北東側を区画Ｂ、南側を区画Ｃとする。標高は区画Ａが高く、区画Ｂ・Ｃが低い[図3-4]。

Ａ．区画Ａ

区画Ａは南北に約30m、東西に約40mを測り、東側と南側にほぼ直線的に設置される石塁によって

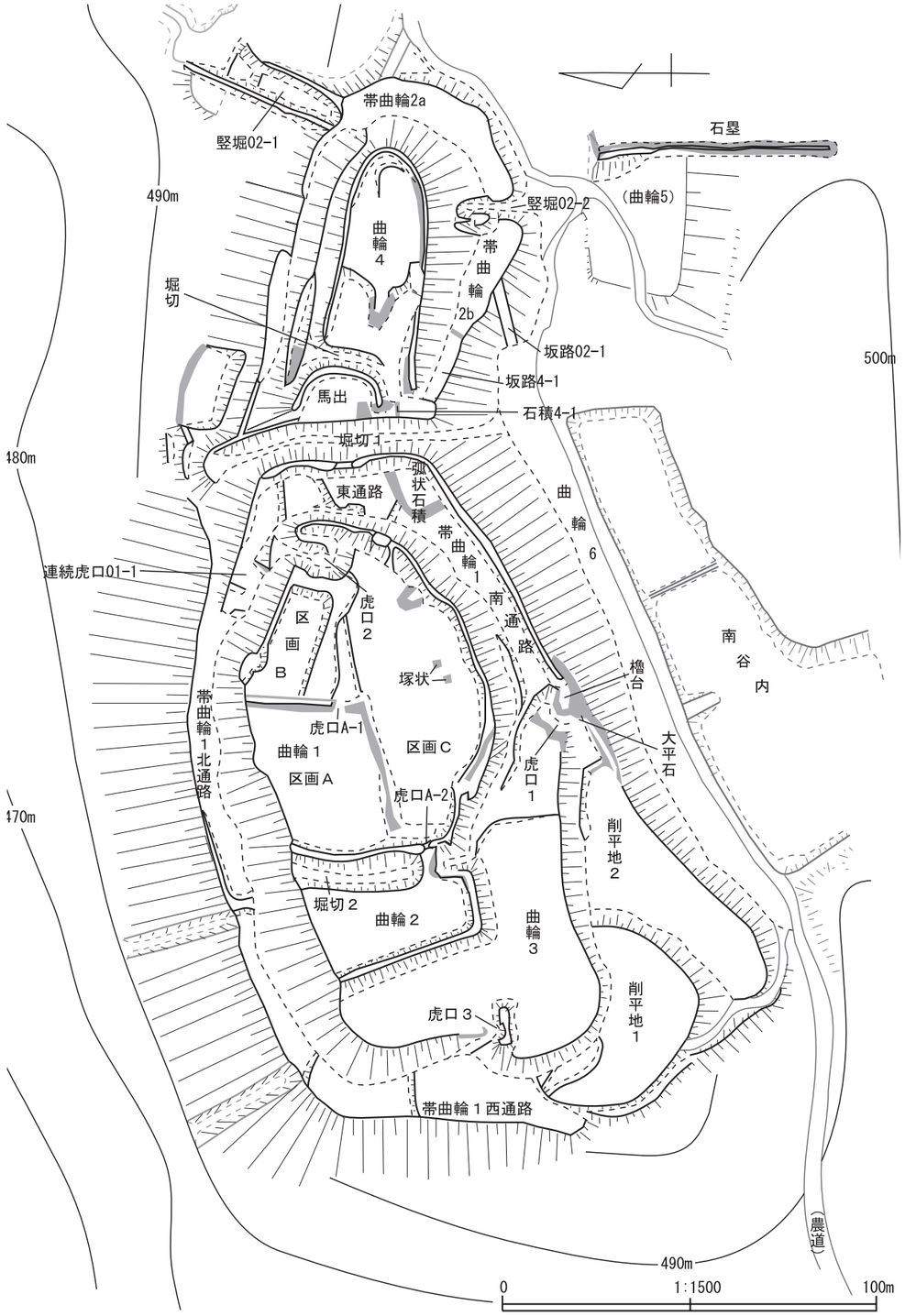

図 3-1　柏木城跡中心部（石田明夫原図を使用・改変）

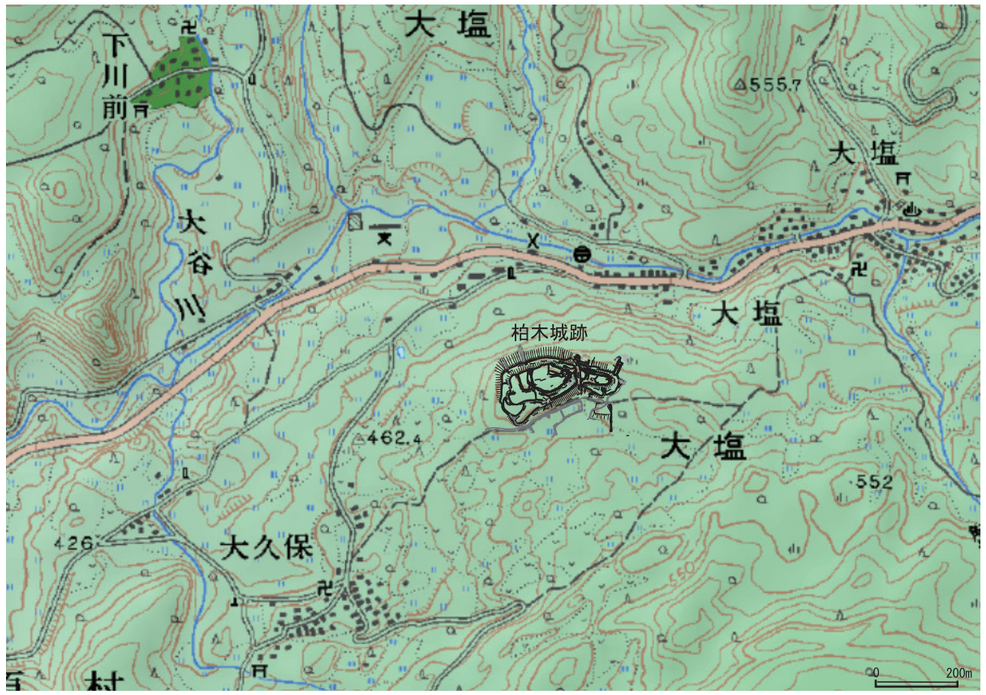

図3-2　柏木城跡周辺の地形
柏木城跡は、大塩地区、大塩川を望む山の上に立地する。大塩地区は、桧原を経て米沢に至る古道米沢道（後の旧米沢街道）や細野に抜ける谷、磐梯山を北に迂回する道などが集結し、西に向かうと大久保から関屋をへて、会津盆地へと抜ける。
［国土地理院2万5千分の1、KASHMIR3Dを用いて作成］

図3-3　北側から望む柏木城跡
前面の山全体が柏木城跡。手前に大塩川が写真左から右に向かって流れている。

区分される。北側には土塁等はなく切岸となる。西側は低めの土塁により画され、堀切を挟んで曲輪２に対面する。区画Ａ東石塁・南石塁は、現状では草木の繁茂により十分な確認はできないが、上面にはほぼ全面で石が積まれているようであり、土塁ではなく石塁と見られる。東石塁の南側、曲輪中心寄りには石塁の切れ目があり、その両側には長さ80cmを超える石が北側に１個、南側に２個並べて配されており、区画Ａへの出入り口（虎口A-1）を構成している[図3-5・3-6]。虎口A-1は平入りの虎口で、虎口A-1から区画Ａの南側を通り、曲輪２への出入り口となる虎口A-2がある。虎口A-2は土塁の切れ目であり、そのまま土橋に接続する。また、区画Ａ西土塁には、その北にもう１箇所土塁が切れている部分がある。堀切２をはさんで相対する曲輪２には土台となるような石の存在も認められることから、木橋がかけられていた可能性がある。

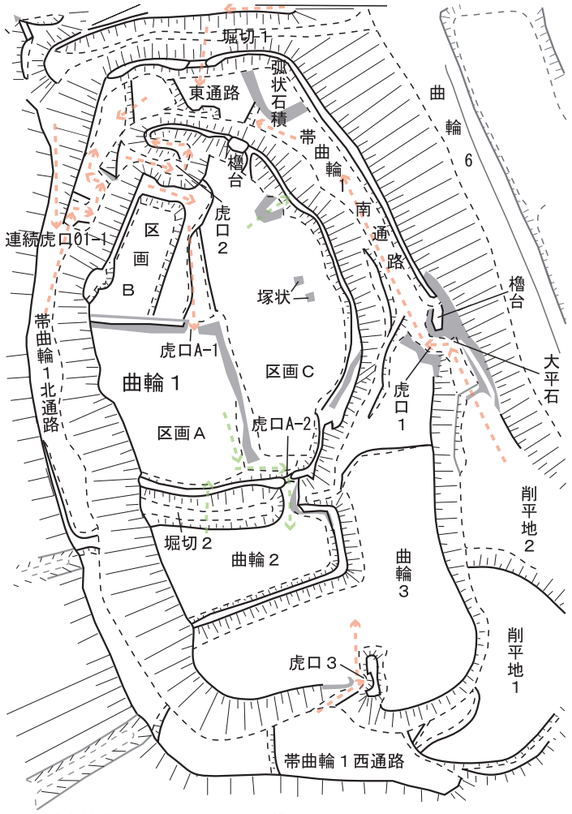

図3-4　柏木城跡主郭とその周辺の遺構

図3-5　区画A　東から
手前が区画Aへの出入り口（虎口A-1）。

図3-6　虎口A-1　西から
虎口A-1にはおおぶりの石が配される。奥が区画BとC。

Ｂ．区画Ｂ

区画Ｂは大部分が周囲から一段下がる長方形の竪穴状となる。北側は土塁と急な法面（切岸）によって画され、東から南にかけては幅２ｍほどの通路状の高まりがあり、ほぼ直角に折れて虎口２と区画Ａへの出入り口（虎口A-1）を結んでいる[図3-7]。

Ｃ．区画Ｃ

区画Ｃは曲輪１の南半分を占め、形状は半月形となる。東端部は虎口２に面し、西端部は虎口A-2

に接しており、区画Ａ南通路からはやや下がっており段差が認められる[図3-8]。東から南にかけては高さのある土塁[図3-9]と帯曲輪に下がる切岸によって画されている。土塁は柏木城跡のなかでは最も高さがあり、上面や内側の法面上方には石を配する部分も多く、堅牢な作りとなっている[3-10]。区画Ｃ東土塁の一部には上面が広がりをもつ箇所があり、東側の帯曲輪や馬出を望む位置にあることから櫓台とみられる。また、南東と南西には土塁が切岸とともに緩く折れ曲がった箇所があり、横矢掛りに類する地業の可能性がある。土塁の高さは櫓台と南東の横矢掛りとみられる遺構がある辺りが最も高く、西に行くにつれて高さを減じている。

図3-7　曲輪A区画B　西から
手前と左側が通路。奥が区画A。通路の内側は掘り込まれて一段低くなっている。

一方、区画Ｃからは、土塁に上るために設えられたと見られる坂路がある[図3-11]。坂路は櫓台と横矢掛りと見られる遺構の近くで土塁の高さがある部分にかけられており、表面には石が敷かれ強度を高めており、平場から土塁上への兵の移動に留意した近世城郭にみられる雁木坂に類する施設と認識できよう。ほかに、区画内で2箇所、石を積んだ塚状の高まりがある。

図3-8　区画Cの西側　北から
区画Cの西側は、まわりの通路から一段下がる。

図3-9　区画C東側の土塁　西から
曲輪1区画Cの東側には高さのある土塁が築かれる。最も高い部分が櫓台。

図3-10　土塁状の石
曲輪1区画C東～南の土塁状には石が配される。

図3-11　土塁へ上る坂路　東から
曲輪1区画Cからは、土塁の上に上がるための坂路が造られている。近世城郭にみる雁木に類する遺構と思われる。

D．虎口２

曲輪１への出入り口で明確なものは東側の虎口２である。虎口２は帯曲輪１から直接主郭（曲輪１）に入るための出入り口で、東西約14m×南北約12mの略方形に掘り込まれた枡形を呈する虎口である。現状では、帯曲輪１からやや急な坂をあがり虎口内部に進入する状態になっている。虎口２内の南壁は区画Ｃを削っており、東は土塁、西は区画Ｂの通路で囲まれ、区画ＢとＣの平場からの深さは約２mを測る。南壁には部分的に石を積んだ箇所が確認されており[図3-12]、その広がりは現況では不明だが、帯曲輪１への出入り口である虎口１とともに、大規模に石を積んでいた可能性がある。虎口２の東壁側には南から北に向かって上がる通路が確認できる。したがって、虎口２から曲輪１への進入経路は二通り考えられ、進入後左・左に折れ、土塁端部にとりついて鋭く南折し土塁上を通って内部に入る経路と、進入後左・左に折れ、再度左に折れて、進入口を越える木橋もしくは門の上などを渡り区画Ｂ東の通路に入る経路である。仮に前者とすれば土塁上を経路とするため幅の狭い通路しか確保できず、後者とすれば現況では進入口と区画Ｂ通路との高低差は１m弱で、十分な高さがとれず交錯してしまうため、進入口はある程度掘り込まれていたものと想定する必要があり、今後調査検討が必要である[図3-13・3-14]。いずれにせよ主郭への出入り口とは言え相当な屈曲を強いる造りとなっている点が特徴的である。

図3-12　虎口2西壁の石積　南東から
虎口2内部の壁には所々で石積みされた様子がうかがえる。

図3-13　虎口2　南から
奥が外からの出入り口。内部で細かく折れ曲がる。

図3-14　虎口2　北から
虎口2は周囲から掘り込まれ、桝形虎口となる。
平成25年暮れの初雪のころ。

2　堀切２

東の曲輪１と西の曲輪２を画する堀切である。幅約10mを測り、南北に伸びて北は切岸に開口し、南は曲輪３に開口する。現状では断面Ｕ字状となる[図3-15]。やや南に寄った場所に土橋が設けられ、土橋上部は曲輪１と曲輪２の土塁に接続している[図3-16]。土橋の北側は傾斜の急な法面だが、南側は傾斜が緩く、ここに曲輪３からの出入り口を想定する意見もある[図3-17]。ただしその場合、空堀にかけられた土橋の防御機能は不十分なものとなり、曲輪１の最重要区画である区画Ａへの進入も容易となる位置関係にあるため検討の余地があろう。

図3-15　堀切2　南から

図3-16　土橋　北西から
曲輪2から土橋を望む。奥が曲輪1区画C。

図3-17　堀切2南側　南から
中央の凹みが堀切2にかけられた土橋。右が曲輪1、左が曲輪2、一段低い手前が曲輪3。

3　曲輪２

東西・南北が約25m・45mを測る台形に近い曲輪である。東側は堀切を挟んで曲輪１に隣接し土橋で結ばれる[図3-18]。西から南にかけては一段低い曲輪３により囲まれており、北側は切岸となる。曲輪３との間は土塁が設けられ土橋から西側の切岸まで続いている。

図3-18　曲輪2　東から
曲輪1から土橋を経て曲輪2を望む。奥は曲輪2南土塁。

4　曲輪３

曲輪１・２の南から西を取り巻く曲輪で、鉤形を呈する。東端は帯曲輪１の虎口１に接し、曲輪１南切岸の下から曲輪２の西に広がる。西側には帯曲輪１から切岸を斜めにあがる出入り口（虎口３）がある。曲輪３の西側と南側には土塁はなく、切岸によって画される。

A．虎口３

曲輪３西側の切岸中央付近で、塁線が食い違う部分が出入り口となる食違い虎口である。帯曲輪１から切岸を斜めに上がる坂路は曲輪３内の出入り口南側土塁で遮断され左に屈折する[図3-19]。虎口１・２に比べると簡易な印象を受けるが、斜路東側の切岸には部分的に石積みが認められる[図3-20]。

5　帯曲輪１

曲輪１南側の虎口１から、南通路・東通路・北通路をへて曲輪３西側の虎口３付近までを取り囲む帯状の平場で、南通路から東通路の屈折部には弧状石積、北側通路の虎口２付近には連続虎口などがある[図3-4]。

A．虎口１

虎口１は削平地２を通る西からの通路を経て帯曲輪１に入る出入り口である[図3-21]。なお削平地１・２は後述のように近年の耕作等により削平された平場である。この削平により西からの通路はそ

図3-19　虎口3　北西から
帯曲輪1西通路から虎口3を望む。曲輪3西切岸に対して斜めに上がっていく。

図3-20　虎口3　西から
手前のポールのある箇所が坂路。進むと土塁に突き当たり、左に折れて、曲輪3に入る。切岸に石積みがある。

の大半が失われているが、遺存している範囲を見ると北側は曲輪３南東の切岸に接し、南側は土塁が設けられ、曲輪６へと下る高さのある切岸が続く。南土塁の上には石が配されており、堅固な造りとなっている。虎口１には、南東に櫓台とその西法面に配された大平石と石積み、北側に曲輪３を削った壁があり、そこにも丁寧に石積みが施されて、帯曲輪１への進入路を北へ１回、東に１回屈折させている[図3-22～25]。北側の一段高い曲輪３と南の土塁とに挟まれた枡形虎口である[図3-26]

図3-21　虎口1手前　西から
虎口1手前から撮影。奥に大平石が見える。
左は曲輪3の南切岸。

図3-22　虎口1北側の石積み 東から
虎口1北側（上の段は曲輪3南東端）には石積みが施される。

図3-23　虎口1北側の石積み　南から
現状で7段程度の石積みが確認できる。正面を横方向に長い面を向ける。

図3-24　虎口1北側の石積　東から
左の写真と同一の石積み。急な角度で積み上げている。その分、石積みの高さは低い。

図3-25　虎口1北側の石積み　東から
茂っている樹木により崩れている部分もある。

図3-26　虎口1　東から
周囲から一段低く掘り込まれる。石積みを施した桝形虎口である。

B.　櫓台

虎口１の南東に位置する櫓台は、帯曲輪１の南外縁に築かれた土塁の西端がとぎれた箇所に設けられており、約５×３ｍの小規模な平場となっている[図3-27]。虎口１に隣接し通路への見通しも良いことから櫓台と推定したものである。

図3-27　大平石・櫓台・土塁　西から
虎口1東側の大平石は、帯曲輪1南通路の南土塁西端の櫓台法面に接している。

C.　大平石

虎口１南東壁面（櫓台西法面）には石が積まれており、通路に面する側には前記したように大平石が配される。この大石は約1.2×1.0×0.5mほどのほぼ直方体を呈し、立てられて最も大きな面を通路の外側（西側）にむける[図3-28～29]。近世城郭では大手口や搦手口の石垣に巨石を配し後にこれを「鏡石」と呼称する場合もみられる。柏木城跡のこの大平石については、城郭中心部への出入り口にあたり、外部からの進入者に対する側に大きな面を向けており、近世城郭の出入口においてしばしばみられる「鏡石」に類した据え方をされているが、周囲に積石を配していない点で異なっている。戦国時代末期での「鏡石」の呼称については確認できなかったことから、本書では石の特徴による呼称とした〔北垣1981〕。

図3-28　大平石　西から
ほぼ直方体の大石が、出入り口外側に平らな面をむけている。近世城郭にみる「鏡石」に似る。

図3-29　大平石　南から
側面のようす。正面に比べると厚みがない。背後の樹木により抑えつけられている。

D.　南通路

帯曲輪１南側は、概ね直線的に伸びており長さ約50m、幅約５～８ｍの広くて長い通路となっている[図3-30]。この部分は目立つ段もなく、一気に駆け抜けることができる。北側は曲輪１の切岸で、高さもあり土塁上からは帯曲輪南通路を見下ろすことができる。通路の南縁には土塁が築かれ、土塁上には石が列状に配されている状況が観察できる。土塁外側は高さのある切岸となる。

図3-30　帯曲輪1南通路　西から
虎口1を入ると幅の広い直線的な通路が延びる。

E.　弧状石積み

帯曲輪南東には、弧状石積みと呼称する遺構がある[図3-31～34]。石が数段積み上げられた石列および石塁が、東西方向と南北方向にＬ字状に配されるもので、両端が土塁に接していることから石積み・石塁と土塁に囲まれてほぼ方形に区画された空間となる。北側の区画石列は、西半が石塁、東半が石積みとなる。この北側東石積みの背面は帯曲輪１東通路であるが、帯曲輪南通路から一段上がっており、ちょうどその段差を石積みで土留めした形となっている。西側を区画する石塁は崩れ気味であるが現状で２段程度石が積まれている状況が確認できる。弧状石積みの北西隅は幅１ｍ弱ほど石列が途切れており、ここが開口部となって内部への出入り口となっていたものと推測される。

図3-31　弧状石積み区画から帯曲輪1南通路を望む　東から
帯曲輪1南通路を東からみる。

図3-32　弧状石積み区画北側　西から
やや大きめの石が3段前後積まれている。

F.　東通路

曲輪１東土塁外の切岸と帯曲輪１東土塁との間を通る。中央が最も高く、南通路に向かって一段、北通路に向かって２段、全体的に下がる段が設けられている。曲輪１の切岸下には溝が掘り込まれ、切岸の高さを確保しているようにみえる。

東側の土塁は中ほどの一部が途切れており、堀切１を挟んで馬出・曲輪４に面している。対面する馬出には堀切１寄りの南西側に虎口が設けられており、曲輪１・帯曲輪１と馬出の関係を踏まえれば、この、土塁が途切れた部分には木橋などが

図3-33　弧状石積み区画北側　南から
積み石は横方向に目地が揃う傾向にある。たてられた石もある。

図3-34　弧状石積み区画　南西から
東と南の土塁と、西の石塁、北の石塁・石積みでほぼ方形の区画が造られている。

架けられ通路が設けられていた可能性がある。

G.　北通路

曲輪１と曲輪２の北側切岸の下で、東西に伸びる通路である[図3-35]。曲輪１虎口２に進入する箇所が比較的高くなっており、西から進入する際には３段ほどの段が設けられた連続虎口O1-1を通ることになる。連続虎口は左右に曲折する虎口で、段を上がったところに壁が設えられる。西からO1-1連続虎口に入ると、１段目をあがり右折れして曲輪１切岸に当たって左折れし、２段目に上がって壁に当たり左折れして、北側の切岸の前で右折れ、３段目に上がってようやく東通路に出ることがで

図3-35　帯曲輪1北通路　西から
左上段は曲輪1で高さのある切岸となっている。

図3-36　連続虎口O1-1の石積み　西から

図3-37　連続虎口O1-1　西から
帯曲輪1北通路から虎口2へ入る直前に、坂を4折れさせる入り組んだ虎口が配される。

き、虎口２へ入ることが可能となる。４回の屈折を経る連続虎口となっており、虎口２付近の防御を高めている[図3-37]。２段目の壁となる部分には石積みが確認され[図3-36]、堅牢な作りとなっている。連続虎口の下から西に向かっては概ね平坦な通路が続くが、途中２か所に低い段が設けられている。

一方、階段状の連続虎口を登らずに北へそれると、大塩の集落がある大塩川の河岸段丘まで下るつづら折れの通路となる。

H.　西通路

曲輪３切岸の外側をまわる通路であり、南側でやや広がっている。中ほどに段があり、その北側では概ね平坦、南側では北に傾斜する。通路南端は削平地１に接しており、改変を受けている可能性がある。

6　削平地１・２

削平地１・２は聞き取りにより、現代において耕作等により削平を受けていることが判明した場所である。曲輪の形状を大きく変えるほどの削平ではなく、もとの曲輪の形状をある程度は残しているものと思われる[図3-38]。削平地１は曲輪３の南西で、帯曲輪西通路よりやや高い。削平地２はそこから一段下がっており、帯曲輪への出入り口である虎口1への通路もこの削平地2によって削

図3-38　削平地2　東から
手前が削平地2、奥の一段高い段が削平地1。

られている。削平地2の東端には土留め状の石積みがあるが、これは削平後の耕作時のものと考えるのが自然であろう。

7　堀切１

曲輪１・帯曲輪と、曲輪４・馬出を分ける堀切で、長さ約80m、上端幅約10mの柏木城跡最大の堀切である[図3-39]。南端は曲輪６に開口し、北端は北側斜面に開口する。前記したように中ほどの帯曲輪東通路と馬出の間には木橋を架けた可能性がある。

図3-39　堀切1　北から
柏木城跡最大の堀切。西(右)に主郭・帯曲輪1、東(左)に馬出・曲輪4を分ける。

第３節　馬出とその周辺の遺構

1　馬出

西側を堀切１、東側をほぼコの字状の土塁及びその外側の堀切によって区画されている平坦面である[図3-40]。通常馬出は虎口の前面に設けられ、城兵の出入りを防御する目的があるが、ここでは堀切１を隔てた向かいの帯曲輪１に東側土塁の上が低くなった部分があるので、そこから木橋が架けられて出入り口となっていた可能性がある。

馬出の土塁は、高さ約１m弱で、土塁上および斜面には部分的に石が配されているのが確認できる[図3-41]。馬出の土塁平面形は現況ではやや方形を意識しつつも直線的ではなく、丸みを帯びたラインで設けられているが明瞭に半円形ともいい難い。外側の堀切は現況で0.3〜0.5m程度と浅く、曲輪４との間を区画する。北側は切岸となるためか堀はめぐらない。馬出内部には堀切１寄りの南側に石積みを伴う台状の遺構（石積み遺構U-1）があり[図3-42]、その南側が虎口U-1となっている。

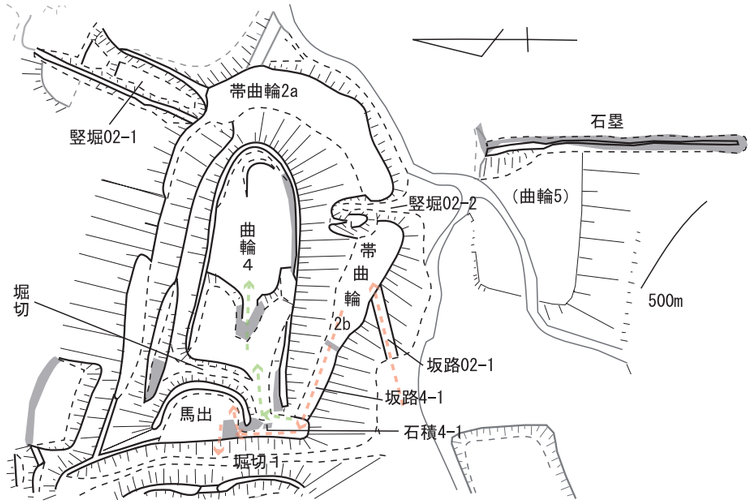

図3-40　柏木城跡馬出周辺の遺構（石田明夫原図を改変）

図3-41　馬出　西から
中央に見えるのが馬出。周囲に土塁が巡る。その奥は曲輪4。馬出と曲輪4からの出入り口は南側(右側)にある。
手前は帯曲輪1東通路で、土塁と堀切1が並ぶ。土塁には切れ目があり、馬出への通路であったとみられる。

図3-42　馬出 南側土塁上の石　北から
馬出の南から東・北にかけて築かれた土塁には石が配される。

図3-43　馬出の出入り口(虎口U-1)　東から
馬出内部からの出入り口は南側土塁と台状遺構の間をとおり、南(左)に折れる。

A.　虎口U-1

馬出内部の南側に石積み遺構U-1、土塁南端部の外側に石積み遺構4-2がある。内部の石積み遺構U-1は一辺が約１m程のほぼ方形を呈し、高さは約0.8mを測る。北側側面には石を積んだ状況が確認できる。馬出への出入り口は石積み遺構4-1の西側を通り[図3-44]、土塁端部と堀切の間を抜け、土塁と石積遺構U-1による食違いの虎口U-1に入る。

2　曲輪４

曲輪４は、西で馬出に接し、北・東・南は土塁と高さのある切岸で画される。平坦面は段差によって東と西に区画されて東が高く西が低い。両者は緩い坂路で結ばれており、西側に大きく入り込んだ

図3-44　曲輪4の出入り口(虎口4-1)
正面が馬出の土塁。土塁の切れ目と堀切1（左側)の間を抜けて馬出内部へ。土塁手前が石積み遺構4-1。右へいくと曲輪4。

図3-45　石積み遺構4-1　東から
ほぼ方形となる2〜3段程度の石積み。

坂路が馬出外側の堀切近くまで伸びる。曲輪の南西隅、馬出の土塁端南部にある外側には石積み遺構4-1があり、その付近が出入り口（虎口4-1）となっており、石積みがあることで経路が屈折する。虎口4-1からは下方の帯曲輪2bに下りる坂路4-1がある。

A.　石積み遺構4-1

石積み遺構4-1の積石は現状で多くて３段程度で高さはあまりない[図3-44]。東と南側は面をそろえて石を積んでいる状況が確認され、現状では約1.8mの方形を呈した石積みが崩れたように見受けられる。この石積み遺構4-1の東側が曲輪４の虎口4-1にあたり、曲輪４下方の帯曲輪2bから坂路4-1を上がってくると、上りきった場所で西側の堀切１にぶつかり、右折すると石積み遺構4-1にあたる。石積み遺構4-1と堀切１との間を通れば虎口U-1を経て馬出に入り、東側に折れれば虎口4-1を経て曲輪４へと入ることになる。

3　帯曲輪２

曲輪４の東と南に設けられる。中ほどに曲輪４南切岸の途中から掘り込まれる竪堀O2-2によって、北と西（2aと2b）に画されている。平場の北端は竪堀O2-1に接しており、そこから西側には伸びない。西には曲輪４と馬出から帯曲輪2bに下る坂路4-1があり、南には西側一段下の曲輪６へと下りる坂路O2-1がある。坂路4-1から坂路O2-1へは帯曲輪2bで強く屈折する。

A.　帯曲輪2a

北端は竪堀O2-1が接しており、その西側の土塁により画され、南西端には竪堀O2-2が配される。曲輪４からの切岸東下端をまわっており、現状で切岸裾には一抱えもあるような石が並んでいる。平場東側は低い切岸で画されている。帯曲輪2aは幅約10m、延長約50mある平坦面で、ここから曲輪４への切岸は非常に高く急な傾斜となっている[図3-45]。竪堀O2-1・竪堀O2-2とともに城内中心部への進入を遮断する強い意識がうかがえる。

B.　帯曲輪2b

曲輪４と馬出の南西から下る坂路を下りた平坦地で、北は曲輪４切岸、東は竪堀O2-2、南は切岸で画される[図3-46]。曲輪４切岸の下には大きめの石が配される。

C.　竪堀O2-2

曲輪４南切岸の法面途中から掘り込まれる。帯曲輪２を東と西（2a・2b）に分け、その一段下の平場に開口する[図3-47]。竪堀西側では上方が土塁となっている。

図3-46　帯曲輪2a　曲輪4(西)から
曲輪4の下方に帯曲輪2aが広がる。高さのある切岸が両者を隔てる。

図3-47　帯曲輪2b　東から
帯曲輪2bから坂路(画面奥)を上がると曲輪4と馬出へ入る。南側（左）の坂路を下がると曲輪6へおりる。

Ｄ．坂路4-1

坂路4-1は幅約３ｍあり、幅の広い通路となっている。北側の曲輪４切岸裾には大きな石が並んでおり、坂路下方の帯曲輪2bとの境にもこれを画するように石が並ぶ。

Ｅ．坂路O2-1

坂路O2-1は帯曲輪2bから曲輪６に下りる通路である。現状では坂路4-1ほどは明瞭ではなく、周囲の切岸と見分けが困難な部分もあるが、やや幅の狭い通路が設けられている。

図3-48　竪堀O2-2　南から
帯曲輪2a(右)と2b(左)をへだてる竪堀。上は曲輪4。

11　石塁

柏木城跡の南東で南北方向に伸びる[図3-48～50]。確認できる範囲では、石を積み上げて塁としているので石塁とした。柏木城の築かれる丘陵部と南側の山裾との間の緩斜面を塞いでおり、南端は山裾近くまでのび、北端は後年一部削平されたものとみられる。高さは北側では約1.5mを測り、南に向かって徐々に低くなっていく。中ほどからは現況で高さ50cmに満たない。石塁の東側は徐々に標高が上がっていく緩斜面であり、石塁の西側は地盤が低くなっている。曲輪４と竪堀１、竪堀２と併せて東方からの進入を遮断する防御施設の可能性がある。

図3-49　石塁　南から
北側は高さのある石塁となる。石塁の西(左側)が曲輪5

12　曲輪５

石塁の西側に隣接する平坦地である。柏木城跡のほかの曲輪と見比べると近年耕地となっていた場所を挟むため、不明な点も多い。石塁に接している。

図3-50　石塁　北から
南に向かって低くなっていく。

図3-51　石塁　東から
石積みは基底付近に大きめの石を用いている。

13　曲輪６

柏木城跡主要部分の南側、帯曲輪１や削平地２の南切岸に接する[図3-51]。東は帯曲輪2bを経て曲輪４・馬出へのぼる坂路O2b-1の入り口に接し、南は谷地となる。西は削平地２への上り口付近までひろがると見られる。現状では農道が大久保方面（西）から通じてきており、柏木城跡の南側への通路が通され、農道として利用されている。

図3-52　曲輪6　西から
細長い曲輪が西から東へ延びる。左上は帯曲輪1南通路。西側の水田は南谷内。

14　南谷地

曲輪６の南側の谷である[図3-52]。谷は現在水田となっており、往時の様子は不明だが、50年ほど前までは湿田であり、ヘドロ状の湿地であった。江戸期の絵図では堀として描かれる。現在では圃場整備により乾田化されているが、曲輪６の平場から水田面まではかなり深さがあり、斜面も急である。

（長島雄一・布尾和史）

図3-53　南谷地　東から
江戸時代の絵図に描かれた柏木城跡南側の堀は、現在、水田となっている。右が曲輪6で、西(奥)へ進むと大久保地区へ抜ける。